第２０号

平成１８年

航空会だより

発行：航空会
東京大学工学部航空宇宙工学科内
〒113-8656東京都文京区本郷7-3-1
Tel: 03-5841-6610
Fax: 03-5841-8560
Email: kokukai@ko-ku-kai.t.u-tokyo.ac.jp
http://ko-ku-kai.t.u-tokyo.ac.jp/
平成18年4月1日

巻頭言

第３版航空宇宙工学便覧刊行に際して

久保田　弘敏（昭和 40/3．航空工学専修）

便覧は，その学術分野の最新の知識・データを集めたものであるとともに，当該分野の全容を知らせるものとして有用です．航空宇宙工学分野でも，その認識に基き，日本航空宇宙学会の重要な仕事の一つとして，航空宇宙工学便覧の刊行事業が進められてきました．最初の便覧は戦前に作られましたが，新便覧刊行の必要性に鑑み1974年に初版，1983年に初版増補版，1992年に第2版が発行され，現在に至っております．当該分野には世界的なハンドブック等が存在しないことも考えると，その価値は絶大です．

航空宇宙工学便覧刊行事業は，もとよりこの分野の総力をあげて行なわれるものですが，その中で航空会の果たす役割は大変大きいものがあります．初版編集委員長曾田範宗先生（旧教官），同幹事長河村龍馬先生（1941年機体専修），初版増補版委員長河村先生，同副委員長塩入淳平先生（旧教官），第2版編集委員長武田峻先生（1944年原動機専修），同幹事長小林繁夫先生（1950年応用数学科）はいずれも本会会員でいらっしゃいます．

さて，第2版便覧発行後約10年を経て，この分野の発達の著しいことに鑑み，2002年度の第35期日本航空宇宙学会理事会（的川泰宣会長（1965年宇宙工学専修））で第3版航空宇宙工学便覧の刊行が決定されました．日本航空宇宙学会は刊行予算を計上するとともに，編集委員長に小林繁夫先生，編集幹事長に私を指名し，刊行は前回同様丸善株式会社が行なうことを決定しました．この体制のもとに編集幹事21名，章担当編集委員41名からなる編集委員会が組織されました．編集委員会では，編集方針を(1)「第2版」と同様，全体の構成を，A編：基礎および共通，B編：航空工学，C編：宇宙工学に大別する，(2)内容の連続性を保つとともに，「第2版」刊行後に発展した分野を取り上げ，できるだけ新しいデータを使用して内容を充実させる，(3)教科書的記述を減らし，ハンドブックとして，より簡潔で使い易いものとする，とし，目次案および執筆者を決定しました．その結果，執筆者は456名にものぼり，このような大掛かりな編集体制を円滑に運営するため，3名の常任編集幹事が置かれました．常任編集幹事は青木隆平氏（1981年宇宙工学専修），上田哲彦氏（1971年航空工学専修），渡辺紀徳氏（1981年原動機学専修）で，いずれも本会会員です．編集幹事のうち，上杉邦憲氏（1966年宇宙工学専修），小祝弘道氏（1970年航空工学専修），斎藤　隆氏（1975年航空工学専修），鈴木宏二郎氏（1985年航空工学専修），中橋和博氏（1976年修士），藤井孝蔵氏（1974年航空工学専修），本間正修氏（1972年宇宙工学専修），八坂哲雄氏（1965年宇宙工学専修），安江正宏氏（1969年航空工学専修）も本会会員で，章担当編集委員41名のうち15名が本会員であることを考えると，いかに航空会会員が各分野で活躍しているかがわかります．

2003年4月に第1回編集幹事会，同6月に第1回編集委員会を開催して以来，約2年半の編集作業を経て，2005年11月30日にB5版，総ページ1,212の第3版航空宇宙工学便覧が刊行されました．この編集作業の間にご尽力を賜った常任編集幹事，編集幹事，章担当編集委員，執筆者の皆さんおよび丸善株式会社出版

事業部に心からの謝意を表するとともに，刊行事業の主導，支援をしていただいた日本航空宇宙学会理事会および事務局に感謝いたします．小林繁夫編集委員長には大所高所からの適切なご指導をいただきました．おかげをもちまして，最新の航空宇宙工学の進歩を反映した立派な便覧ができあがったと考えております．

航空宇宙分野以外のお仕事に携わっておられる航空会会員各位におかれましても，是非ご活用いただけましたら幸いに存じます．定価は税・送料込みで57,750円で，連絡先は丸善株式会社出版事業部角田一康氏（電話：03-3272-0513，Email: ikko.tsunoda@maruzen.co.jp）です．

報告

航空宇宙工学専攻・航空宇宙工学科の近況について

専攻長・学科長　河内啓二（昭和45/3．航空工学専修）

昨年度の航空宇宙工学専攻・航空宇宙工学科の近況をお知らせします．

法人化から2年が経過し，専攻・学科レベルでの変化が始まりました．効率化と名うって，大学の総予算が毎年２％づつ人件費と物件費ともに削減されていきますので，研究室レベルでは対応に苦慮しています．共通経費は法人化に伴い，全学レベル，学部レベル，専攻レベルでそれぞれ増加傾向にありますので，結果的に全ての削減が研究室予算にしわ寄せされるからです．研究費を外部予算（競争的研究費，受託研，寄付金等）に頼る割合が今後，ますます増加していきます．また，事務の簡素化も始まって，教官それぞれが種々の支出をホームページから直接入力するシステムに変わりつつあります．

教員の移動に関しましては，昨年4月に龍谷大学から西成助教授が着任しました．本年1月には寺本講師が助教授へ昇任されました．西成先生は流体の数値解析[1)]がご専門で，寺本先生は圧縮性流れ・ガスタービン[2)]がご専門です．

学生の就職に関しましては，求人数が増加しており，おかげさまでほとんどの学生が希望通りの就職先に決まりました．学部学生の就職希望者は極めて少なく，ほとんどは大学院修士課程の学生です．

昨年10月には宇宙飛行士の野口聡一さん（平成1/3, 原動機学専修）が来校されました．総長室から本専攻玄関前まで総長とともに学内パレードし，盛んな歓迎を受けました．

頭の痛い問題として，本専攻の使用している工学部7号館の耐震度が大幅に不足していることが判明しました．設計や施行の手抜きという訳ではなく，建物の建築時期の基準が甘かったためです．急遽，補強工事が本年3月に始まる予定で，このお知らせが届く頃には完了している筈です．その間の応急措置として，大人数の集まる講義と卒業設計を7号館外で行っています．

研究・教育活動は上記の困難を乗り越えて活発に行われています[3)]．手作り小型衛星は2号機が無事打ちあがり，目下各種の実験を宇宙で行っています．機械系と合同で行っているCOEプロジェクトでは，UAVやMAVの製作・研究が活発に行われ，愛知万博にも出展しました．この研究分野において，1昨年に続いて2回目の国際シンポジウムが昨年の12月に本学で行われ盛況でした．また，本専攻は駒場の教養課程からの進学先として高い人気を集め続けており，昨年度は工学系全体の中で2番目という位置でした．

1) http://soliton.t.u-tokyo.ac.jp/nishilab/
2) http://www.thermo.t.u-tokyo.ac.jp
3) http://www.aerospace.t.u-tokyo.ac.jp/welcome-j.html

報告

平成１７年度航空会総会および講演会の報告

小泉宏之（平成 14/3．修士）

平成17年度の航空会総会および講演会は平成17年6月18日（土），例年のように神田学士会館本館で開催されました．特別講演は，午後2時半より鈴木真二教授の司会により，「Honda-Jetの開発について　-Hondaの挑戦-」と題し藤野道格氏（昭和59/3．航空工学専修）によって行われました．藤野氏は現在ノースカロライナ州にあるホンダアメリカでバイスプレジデントを勤めており，Honda-jet開発のチ

ーム代表として活躍しています．Honda-jetは小型ビジネスジェットをターゲットとして，世界最小クラスながら広い室内空間をもち低価格・高性能を目的とし開発された航空機です．講演では，Honda-jetの様々な特徴：厚みがあり後退角の小さい層流翼，翼上面に配置されたエンジン，大きなウィングレット，全複合材胴体，層流ノーズなど，これらの独創的な設計が生まれた経緯を，設計指針から計算方法，実験方法に渡るまで細かく解説されました．特に独創的な主翼上面配置の開発にあたっては，CFDによる最適化と実験による実証を巧みに用い，主翼流れとエンジンの相互作用がうまく利用できる絶妙な配置を探し出すことに成功しています．各所においてこれまでの航空機設計の常識とは異なる思想が盛り込まれたHonda-jetは，まさにホンダらしい航空機と言えるでしょう．最後にプロジェクト成功の秘訣として，フラットな組織とオープンな環境，現場を大事にする三現主義，最終的なゴール意識を共有することによるモチベーションの向上などがあげられました．

質疑応答の時間には多くの意見がかわされ，その中で今後の航空機開発にはこれまでのような性能追求の姿勢だけでなく，自動車のようにインテリア・エクステリアなどによって商品価値を高めていく意識が必要ではないかという藤野氏の意見には大いに同感するところがあります．なお，Honda-jetの初飛行試験が行われた2003年は，折りしもライト兄弟が同州キティホークにおいて初飛行を達成した100年後にあたる事実も感慨深いものがありました．

講演会後の総会においては，例年のように学内サークル「Ｆ－Ｔｅｃ」による鳥人間コンテストの報告と今年度の抱負が報告され，夏の大会に向けて声援が送られました．総会・懇親会の参加者は９１名で，来年の再開を期して閉会となりました．

総会特別講演会での藤野道格氏

報告

野口宇宙飛行士　-その無事な帰還と専攻への帰来-

長島利夫（昭和44/5．原動機学専修）

日本いや世界の茶の間をわくわくさせた野口聡一氏（平成1/3．原動機学専修）が，昨年10月26日午後, シャトルに積まれSTS-114”Return to Flight” ミッションを果した大学応援旗と共に専攻までやって来ました．(写真1) 工学部7号館玄関前には，写真2のとおり黒山の人だかりが待ちうけ，総長室から徒歩でキャンパスを凱旋し到着した“ 我らが野口宇宙飛行士 ”を限りない拍手と歓声で迎え入れました．忙しいスケジュールの合間をぬっての短い時間でしたが，後輩への激励メッセージ，大学応援旗ならびにシャトル内で撮影された専攻ロゴ（再開50周年記念に公募採択）写真への署名, OFK証明書（写真3, 大学応援旗が宇宙を飛んだ証明）手渡しを済ませ，専攻からの花束を胸に抱えながら乗ってきたタクシーで専攻を後にしました．今回の大学応援旗のほか，97年11月宇宙遊泳した先輩土井隆雄宇宙飛行士（昭和53/3．宇宙工学専修）が持ち帰った専攻旗も玄関先に並べられて，写真1の光景とおり，皆が嬉しいひと時に酔いしれました．

写真1　野口宇宙飛行士

写真2　工学部7号館玄関前の様子

先日のニュースによれば，今後，野口・若田の両宇宙飛行士がISS長期滞在をはじめ，JAXAの有人宇宙活動の要石となることが決まったようです．有人宇宙活動の場として，NASAのシナリオでは，月面そして火星があげられています．この分野では，やはりロシアに一日いや千日の長があるようで，野口さんがモスクワ郊外のガガーリン宇宙センターに派遣されるとの話も紹介されていました．先日，零下45度とか記録的寒波にあったモスクワですから，帰還後の体調に留意され益々の精進を皆で祈りたいと思います．頑張れソウイチ，フレー！フレー！

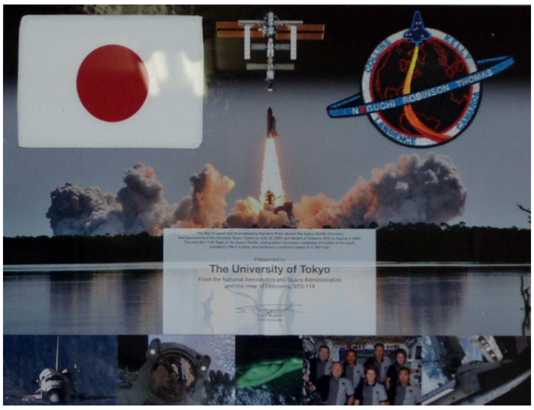

写真3　OFK証明書

報告

革新飛行ロボットプロジェクトIARP（Innovative Aerial Robot Project）活動報告

鈴木真二（昭和52/3．航空工学専修）

IARPは東京大学２１世紀COEプログラム「機械システムイノベーション」の開始に伴い，研究室，専攻を横断し，産業界との連携も意識した研究教育プロジェクトとして航空宇宙工学専攻を中心に結成されました．５年計画の３年目にあたる平成１７年度は，愛・地球博「プロトタイプロボット展」への飛行ロボット出展，第２回国際会議の開催，第１回全日本学生室内飛行ロボットコンテストの開催など，活発な活動を展開しました．

「飛行ロボット」は災害時の上空からの観察や，自然・環境観測などの用途が期待される無人の自律航空機です．そのための基礎研究，設計，製作，飛行試験，応用研究といった広範な活動を，大学院生を中心とする分野・組織横断的な活動で展開しています．愛・地球博「プロトタイプロボット展」へ出展した携帯電話回線を利用する高機能飛行ロボット「OBK-SkyEye」は，その成果の一つです．万博展示をひかえた平成１７年５月には飛行実験を一般公開し，神戸市長田区での総合防災訓練への参加，広島県「八幡原湿原」の植生観測など実用化を目指した検討も進めています．また，IARPは，より小型なマイクロ飛行ロボット，マイクロ波による空間エネルギー伝送，複合材料技術など先端的研究にも取り組んでいます．

国際交流は，COE活動のねらいの一つであり，IARPも平成１７年１２月には，第２回国際会議を宇宙エネルギープロジェクトとの共同で浅野キャンパスにおいて開催しました．多くの学生が英語での発表を経験し，海外の著名な研究者との交流を深めることができました．

小型無人機とはいえ，設計から飛行試験まで体験できることは，航空工学の教育的観点からも大きな意義があることが，こうした活動を通して実感できました．航空宇宙工学科に進学してくる学生は，最近は模型飛行機も作った経験の無いものがほとんどです．従来の大学での教育だけで，社会へ送り出し，ロケットや衛星，飛行機を設計させるのも心配です．航空工学の実践的教育活動として，平成１８年１月には，日本航空宇宙学会の主催により，IARPが中心となり，他大学の先生方にも呼びかけ，第１回全日本学生室内飛行ロボットコンテストを開催しました．会場となった大田区産業プラザには，７大学，３高専から２２チームが参加しました．競技は，床に置いた紙に書かれた文字を機上の無線カメラで読み取る正確さを，ラジコン自作機で競います．本学の学生はこうした活動には不向きではないか

と心配もしましたが，飛行機部門において４年生チームが優勝，３年生チームが準優勝という予想外の好成績を残してくれました．また，別の４年生チームは「ベストプレゼンテーション賞」も受賞しました．室内飛行大会としたのは，大学での体育館での練習を可能とし，小型軽量化が技術の向上につながると判断したためです．見事な飛行を見せた機体，調整不足で本領を発揮できなかった機体とさまざまで，会場は歓声とため息で盛り上がりました．今後，メジャーな大会へと発展し，より多くの若者が航空工学に興味を持ってくれることを願っています．国産機の開発にご苦労された諸先輩の皆さん，本当は航空分野に進みたかったOBの皆さん，我々のIARP活動に参加ご協力いただけませんか．自ら設計し製作した機体を大空に飛行させれば航空学科，航空宇宙工学科へ進学したころの夢がよみがえるに違いありません．(飛行ロボット大会HP：http://www.flight.t.u-tokyo.ac.jp/~indoorflight/)

愛・地球博での飛行ロボットの展示

寄稿

中須賀研究室での超小型衛星開発

中須賀真一（昭和58/3．宇宙工学専修）

　当専攻の中須賀研究室では，1999年より10kg以下の超小型衛星の研究開発を行っています．第一の目的は宇宙工学の実践的な教育を行うことにあります．ミッションの創造から衛星アイデアの熟成，設計，製作，地上試験，打上げ，運用という宇宙ミッションの１サイクルを，学生が卒業するまでの１～２年程度の短期間に経験することで，何が大事であるか，まずい設計や製作はどのような結果を生むかを現実世界から厳しく教えてもらい，あわせてプロジェクトマネジメントや文書管理などの鍛錬にもなり，我々教官が授業や紙の上では教えきれない実践的な教育ができると考えています．また，これまで数100億円，５年以上の開発期間がかかった衛星プロジェクトを，１～２年の開発期間，1000万円以下の低コストで実現することにより，たとえ大きな衛星とは同じ機能は実現できなくとも，宇宙を利用したいと考える人が宇宙に乗り出す「しきい」を根本的に下げ，多分野からプレーヤーを取り込むことによる新しい宇宙開発の流れを創造しようという挑戦でもあります．

　1999年からは350mlのジュース缶サイズの衛星CANSAT（図１）を作ってはアメリカの砂漠で高度4kmまで打上げて，落下中に衛星機能の実証を行う日米共同実験を年１回繰り返してきました．これは，衛星開発の最初のトレーニングの場で，多くの失敗を繰り返しながら学生は目に見えて成長してきました．ここで衛星開発の基本を習得した学生が，今度は軌道上衛星を目指して2000年に10cm立方，1kgのCubeSatという衛星の開発をスタートさせました（図２）．秋葉原で買った民生品を主として利用し，クリーンブースも研究室内

図1　CANSAT

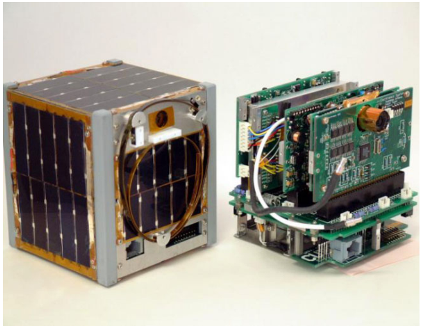

図2　CubeSat XI-IV

に手作りし，また，地上試験も宇宙研やNASDA(いずれも現JAXA)の試験設備を使わせていただくことにより，部品費300万円以下の低コストで2002年上旬にはフライトモデル２機を完成させました．しかし，打上げロケットの探索，周波数の獲得など技術以外のさまざまな壁を乗り越えるためにさらに１年半の期間を要し，フライトモデルの１機CubeSat XI-IV(サイ・フォー)は2003年6月30日，ロシアのROCKOTというロケットでようやく打ち上げることができました．最初の東京を通過するパスで，衛星からの電波を７号館屋上の地上局アンテナで受信できた時は，学生にとってもこれまでの苦労が報われる至福の瞬間でした．その後，XI-IVはさまざまな軌道上実験を成功裏に行い，また，宇宙から見た地球の画像を数日に１枚のペースで送ってきてくれており（図３），その画像は一般の人にも配信するサービスを行っております．現在，打上げ後すでに２年７ヶ月になりますが，ほとんど不具合もなく，まだまだ元気に動作しております．また，姉妹機XI-V（サイ・ファイブ）は，XI-IVの軌道上での成果や問題点などを踏まえて主として画像の質の向上とソフトウエアの改善をほどこし，またJAXAの開発した新型太陽電池の軌道上実証という新しいミッションを加えて，2005年10月27日，ロシアのCOSMOSロケットにより打上げられました．現在，初期運用がほぼ終わり，種々の実験を開始したところで，太陽電池からもよい情報が得られつつあります．２機の衛星が今後どのようなデータを送ってきてくれるか楽しみです．

研究室では，さらに2006年1月22日に，宇宙空間で4機の衛星が大きな網を展開しフェーズド・アレイ・アンテナを構成する実験をJAXA/宇宙研のS310観測ロケットを用いて高度120kmで実施し，成功しました．現在は，30mの地上分解能を目指す5kgのリモセン衛星PRISM（図４），国立天文台と共同で星図を作る10kg級衛星Nano-JASMINE，全く新しいタイプのパネル型衛星PETSATという３機の衛星の開発プロジェクトが平行して進んでおり，今後２年に１回くらいのペースで打上げを行っていく計画です．大学がこのような衛星開発を続けるのは，資金，設備などの面で大変厳しいものがあり，先輩の皆様方にもいろいろご支援をいただければありがたいと考えております．詳細情報は研究室のホームページをぜひご覧ください．

http://www.space.t.u-tokyo.ac.jp

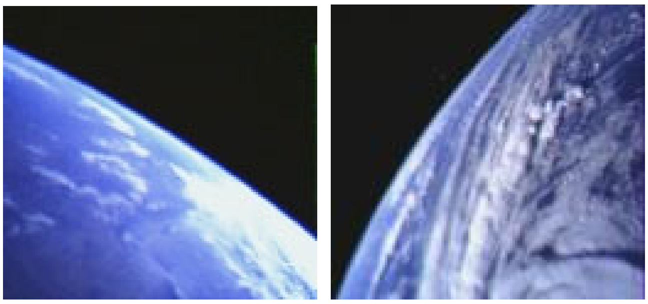

図3 XI-IVが撮った地球画像

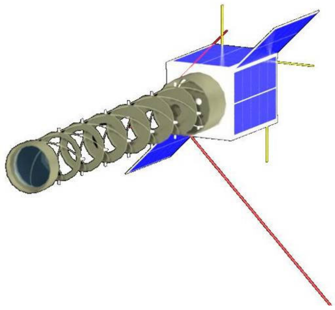

図4　リモセン衛星PRISM

学生会員

第29回鳥人間コンテストでチーム新記録を達成

澤山敬太（システムコース学部４年）

2005年7月16日, 17日に第29回鳥人間コンテストが滋賀県彦根市の琵琶湖にて開催されました．東京大学F-tecは自作の人力飛行機「たんせい壱拾弐號」によって人力プロペラ機部門に出場しました．

17日早朝より開始された人力プロペラ機部門は，無風から風速2m/s程度の向い風という人力プロペラ機の飛行に適した気象条件下で，大会前半から飛距離10kmを超える好記録が2チーム出るというハイレベルな大会になりました．

全20チーム中18番目のF-tecのフライト直前から風が強くなり，フライトができるか心配されましたが，風が安定した瞬間を狙って風速2m/sの向い風という最適な条件下で「たんせい壱拾弐號」は琵琶湖へと飛び出しました．風に乗った「たんせい壱拾弐號」は高い高度を維持したまま安定したフライトを続けました．しかし，湖面上は風が吹き荒れる状況で，めまぐるしく方向が変わる風に翻弄されて飛行方向を変えながらのフライトとなってしまいました．風に翻弄されバランスを崩して右側に傾いた「たんせい壱拾弐號」は右翼から琵琶湖上に着水してしま

いました．飛行距離は1980.06mで，これまでのチーム記録1308.09m(2000年第24回)を700m近く上回るチーム新記録を残すことができましたが，飛行距離10kmを超えるフライトを4チームが記録するというハイレベルな大会の中で順位は6位を記録しました．

チーム新記録を達成したものの，他の参加チームのレベル向上も進んでいる状況において，さらに高いレベルを目指していきたいと考えています．現在も2006年の第30回鳥人間コンテスト(7/22，23開催予定)を目指し，更なる機体の改良・洗練に全力を尽くしています．航空会の皆様には，日頃よりF-tecの活動にご理解・ご支援いただき誠にありがとうございます．今後とも学生の手による飛行機の製作活動を応援いただけますようお願いいいたします．(F-tecのHP: http://ftec.nm.land.to/index.cgi).

たんせい壱拾弐號

書籍紹介

日本最初の後退翼ジェット機Ｔ－１

長尾明敏（昭和28/3．応用数学科）

昭和 33 年 1 月 19 日に T1F2(T-1A ジェット中間練習機の試作機の名称)の 1 号機が初飛行してから，ほぼ半世紀が過ぎようとしています．本書は T-1 の開発に携わった富士重工業の技術者が「日本で初めての純国産ジェット機を作るのだ」という誇りを持って，開発に取り組んだ技術的記録と若き日の思い出の記であります．

当時は戦争で失われた記録と，戦勝国の進んだ技術を推測し，理論付けして何もないところから，航空自衛隊の訓練体系に中間練習機として位置付ける機体を開発したのでした．

従って現在の技術と比べれば幼稚でありますが，新卒にも等しい技術者が計算尺と数少ないタイガー計算機を駆使して開発を成し遂げた時代が伺い知れます．

「照会先：スバルリビングサービス(株)宇都宮事業所次長 栗原哲夫・栃木県宇都宮市陽南 1-1-11 富士重工内」Email: kuriharaT2@uae.subaru.fhi-co.jp

クラス会報告

平成 15 年の航空会役員会にて卒業 5 年毎に N クラス会を開催していただくことが決まり，昨年は昭和 40，45，50，55，60 年，平成 2，7，12，15 年卒の各クラス会が開催されました．

＜昭和４０年卒クラス会＞

私たちが航空学科に在籍した1960年代は、世界的に航空輸送の拡大や宇宙開発の活発化が顕著になってきた時代でした。日本でも国産ターボプロップ旅客機YS-11の開発が始まり、カッパロケットによる宇宙観測も始まっていました。私たちの学年は航空工学専修23名、原動機学専修19名、宇宙工学専修3名、合計45名でした。宇宙工学専修は私たちの学年から新設されたもので、高橋、的川、八坂はその第1期生です。

卒業以来40年が経ちました。まだ現役の会社社長や大学教授もいますが、ほとんどの同期生は第2の人生に挑戦しています。しかし、世の中はいくら高齢化社会だとは言っても、人間60歳を越えると明日は何が起きるかわかりません。そのような危機感もあってか、私たちの同期会開催の頻度は最近とみに繁くなってきました。N年会は待ちきれないので、（N/2）年会はどうかということで確か5年前にもやったような気もするのですが、2003年12月に級友の1人が思い立って同期会をやろうと言い出したら、ウィークデーにもかかわらず、18名も集まりました。その翌年も集まりたいという要望も強かったのですが、満を持して2005年の航空会でのN年会まで待ったという次第です。

当日は、航空会総会の途中から会場を学士会館302号室に移して1次会を始めました。参加者は22名で、福岡の八坂（宇宙）と広島の三好（航空）が最も遠方からの出席でした。お互いに卒業以来久しぶりに会ったという者も多かったようです。アメリカにいる相島（航空）や織田（航空）が来られなかっ

たのは残念でしたが、次の機会を待ちましょう。近況報告をしているとあっという間に時間が経ってしまいました。そこで、場所を変えて飯田橋のグランドパレスホテルに席を移し、二次会を続けました。ここにも20名が集まりました。写真は一次会での写真です。皆、髪も白くなり、腹も出ていますが、よく見ると40年前の「紅顔の美青年」の面影もないとはいえません。

二次会の間に、同期会を毎年、しかも場所を変えて行なおうという相談がまとまりました。そして、来年は東海地区（名古屋）で川澤（原動機学）と高野（原動機）が幹事となって行なわれるということになりました。おそらく今年以上に盛会となることでしょう。(幹事：久保田弘敏，荻田和男)

＜昭和４５年卒クラス会＞

＜昭和５０年卒クラス会＞

平成１７年６月１８日（土）に、航空会総会に連動した昭和５０年卒同窓会が開かれた。当初は東京大学に残っている武田展雄君が幹事を行ってくれるものと思っていたら、当日は学会で日本に居ないと言う。急遽、小生、末益君、齊籐(茂)君、齊籐(隆)君、坂爪君で手分けして幹事を行うことになった。

宴会幹事は苦手なので、会場は武田君が先に手配してくれた学士会館３０７号室で、午後５時から開催する事とし、末益君に宴会等の手配、小生が連絡係となった。ＩＴが普及したお陰で、ほぼ全員とメールで連絡がとれ、全５４名中e-mailで連絡が取れなかったのは４名のみ。お陰で、同窓会の出欠もe-mailで行う事が出来、怠け者の小生には大変楽な時代になったと感じたものである。

当日は、急に出席出来なくなった人もいたが、２４名が参集した。さすがに１０年前と比べて皆白髪が目立つ歳となったが、まずは、各自の近況報告から始めた。歳を取ると少しづつ長くなるのが話と鼻毛。仕事の事あり、家庭の事、愚痴あり、自慢あり、その他諸々おもしろ可笑しく話が進んだが、全員無事で元気で１０年間を過ごした様子。そうこうすれば、アルコールが回り始めて、昔話に花が咲き、学生時代に戻ったよう。あちらこちらで話が弾み、４時間の予定の１次会はあっという間に過ぎさった。みんなで記念撮影をして、さあ２次会という事になったが、宴会担当が決めた学士会館の費用にはサービス料も消費税も入っていないことが判明。しかし、全員が２次会に参加し、人数が多すぎて予約していた店に入りきらず、さまよった末にたどり着いたのが「ニューアサクサチェーン／神田スズラン通り店？」だったが、そこで、相当にアルコールが回っていたにも関わらず、松浦君がしっかり会費の再徴収をしてくれて何とか赤字は免れた。

最初は、総会が終わったら、先生も呼ぼうと言っていたのに、全員、昔話に花が咲いて、すっかり先生の事など忘れ果て、１１時頃に２次会もお開きとなり、更に数人づつに分かれて、３次会に回っていった。小生も、齊籐(茂)君、福永君と近所の喫茶店？で３次会。結局電車がなくなって、自宅までタクシーで帰る羽目になったが、何年たっても昔の友は今日の友で、懐かしい思い出にどっぷり浸かれた１日であった。

１０年後には、もう定年を迎えている事だろうが、又々容貌は変化しても内容は変化してないみんなと合うのが楽しみである。(幹事：柳　良二)

<昭和５５年卒クラス会>

ずいぶん幹事は楽になったものだ。開催案内や連絡はメールだし、店の予約もネット。それでいて、昔と同じ愉快な同窓会が開催できる。同じでないのは、集まった顔が老けたことぐらいだ。我らの同窓会は、東京駅近くの地下の一室で開催した。２０名がちょうど手ごろに収まり、名前を思い出すまでの微妙な間も楽しんだ。恒例の近況報告となると不具合の自慢合戦。「最近世間を騒がしている…」で始まり、「私はあれを設計しました。」の応酬。どれもこれも報道されているだけに、分かりやすい。例はともかく、我々が社会を動かしているという自負だけはありそうだ。５年後は、明るい話題を期待する。無理か。（幹事：上野誠也）

<昭和６０年卒クラス会>

昭和 60 年航空学科卒業のクラス会は航空会総会のあと，近くの居酒屋で行われました．みなさん忙しい年頃にもかかわらず，19 名が集まり，夜遅くまでわいわいと神保町界隈で騒いでおりました．グラスが空くペースは 20 年前と変わらなくても，料理の選択が洋から和へと，おのずから油系を避けており，それなりに年をとったなあ，と妙に実感されるのでした．（幹事：岩崎晃，鈴木宏二郎）

<平成２年卒クラス会>

2005年6月18日（土）に学士会館で同窓会をやりました．同窓会参加者は17名で，遠方からの参加者も含めて懐かしいメンバーが集合し，思い出話や現状報告などでかなり話が盛り上がりました．皆そろそろ年齢的にも仕事で中堅どころになり，各持ち場で忙しい中，予定をやりくりして参加してくれました．メンバーは重工などの航空業界はもちろん，自分で新しく会社を興した人もいますし，医者もいて本当にバラエティに富んでおり，いろいろな分野での活躍の話が聞けました．盛り上がった勢いで２次会にも10名程度がなだれ込み，学生時代に戻ったかのように15年の時を超えて語り合いました．また，これから１年毎に会えるメンバーだけでも会おうという話になり，次回の幹事を決めて夜遅く解散しました．（幹事：西成活裕）

<平成７年卒クラス会>

<平成１２卒クラス会>

<平成１５卒クラス会>

去る2005年6月18日土曜日，花の舞上野店にて平成15年航空学科卒の初めてのクラス会を行いました．当日は合計21名の参加者が集合し，お酒の力も

借りて，４月から始まった新たな生活や今後の人生プランなど様々な話題について楽しい語り合いました．就職したメンバーのこのわずか2ヶ月余りでの大きな成長を感じました．また，多くのメンバーは近くの居酒屋に移動し，話に花を咲かせていました．今回は就職したばかりのメンバーも多く，休みを取るのも困難で参加できないメンバーも多かったことが残念でした．5年後とは言わず，時間を見つけて今後も集まることを確認し，解散となりました．（幹事：高柳大樹）

航 空 会 か ら の お 知 ら せ

（1）航空会総会および講演会のお知らせ

平成18年度の航空会総会および講演会を下記の要領で開催いたします．万障お繰り合わせの上ご出席ください．

記

１．開催日：平成１８年６月２４日（土）
２．会場：神田学士会館本館 (TEL:03-3292-5931)
３．講演会：
　時間：午後２時３０分～４時３０分（含質問）
　「はやぶさ」の飛行と太陽系往還航路への展開
　講師：川口淳一郎先生（昭55/3．修士）
４．総会：午後５時００分より
５．懇親会：総会終了後　直ちに開催
　会費５，０００円（在学生：１，０００円）

ご出欠を同封の会費振込用紙により4月30日までにご回答下さい．会費振込用紙は名簿の訂正更新にも利用しておりますので，ご出欠のほかに，ご氏名，卒業年月，コース名，現住所，封筒ラベル最下段に記してある整理番号，および勤務先が変更された方は新しい勤務先を必ずご記入下さい．なお，Email，FAX でも出欠を受け付けます．その場合，上記事項に加え，Email の場合は subject に「航空会総会申し込み」と明記されるようお願い致します．

（2）会費・通信費について

航空会の「会費・通信費」として年額 1,000 円ずつご納付頂いております．総会ご欠席の方は平成 18 年度分を同封の振込用紙にてご送金下さるようお願い申し上げます. 整理の都合上, 振込用紙の通信欄に卒業年月（名簿の索引に記載されています），コース名をご記入下さい.

口座番号：00150-1-55763
加入者名：航空会

なお, 卒業後 55 年以上経過された会員の方からは「会費・通信費」は頂かないことになりました．本年度は昭和 26 年以前に卒業された方が対象です．一方，若い会員の方々には, 進んで会費をご負担頂きたくお願い申し上げます．本会はこの会費・通信費のみで運営されています．よろしくお願いいたします.

（3）航空宇宙工学専攻研究室公開のお知らせ

再開５０周年記念行事の一環として，昨年度より，本郷キャンパス五月祭を利用して，研究室の公開を実施しています．学部学生の各種展示の外，各研究室，最新の研究成果や，活動を展示いたします．この機会に母校をぜひお訪ねください.

日時：平成 18 年 5 月 27, 28 日(五月祭期間中)

（4）「夏休み航空宇宙工学教室」 のお知らせ

数年前より, 夏休みを利用して, 小中学生を対象とした「夏休み航空宇宙工学教室」を本郷キャンパスで開催しています. 模型飛行機やペットボトルロケットの製作, 飛行を通して航空宇宙工学の楽しさを知ってもらうのが目的で，学生，教職員が，簡単な講義や実験も交えて行っています. 最近は, お子さんを連れて参加する卒業生も多く見受けられ, 毎年盛況になっています. 本年も 7 月上旬ごろより受付を開始する予定です．学科ＨＰに案内を掲載いたします.

（5）見学会の報告

平成 17 年 5 月 24 日に川崎重工岐阜工場の見学を実施いたしました. 本会会員により，最近の航空機開発状況の説明を受け，工場内を見学させて頂きました.

見学後の懇談会の様子

参加者からは, 最新の生産現場を直接見学できて良かったとの感想が聞かれました. 川崎重工の皆さんありがとうございました. 本年は本郷キャンパスの公開をもって見学会の代わりとしたいと思いますが, ご要望があれば今後も実施する予定です.

（6）航空会会員名簿 2006 年改訂版 のお知らせ

前回発行された名簿は 2001 年版で，それ以来 5 年振りの改訂となります．2006 年版航空会名簿は 2006 年夏ごろの発行を予定しています. 定価は送料込みで 1,500 円です．同封の振込用紙でお申し込み頂けるほか，6 月 24 日の航空会総会会場でもお申し込み頂け

ます．是非ご購入頂きますようご案内申し上げます．なお，お問い合わせは E-mail にて航空会までお願い致します．

（7）航空会懇親ゴルフ大会

例年通り9月の第二木曜日，コースも同じく湘南CCで第13回のゴルフ大会を開催いたします．前回は幹事の仕事をものともせず地元の利を活かして日根野が優勝してしまいましたが，今回また皆様のご奮闘を期待いたします．要領は下記の通りですので，是非ご参加ください．

日時　：平成 18 年 9 月 14 日（木）
場所　：湘南カントリークラブ
費用　：約 2 万 5 千円

参加ご希望の方は下記幹事までご連絡ください．

日根野　穣　（昭和 32/3．航空学専修）

青村　明　（昭和 46/6．航空工学専修）

（8）クラス会のお知らせ

本年度のNクラス会，卒業後２年目のクラス会をお願いしている幹事の方々は以下の通り（敬称略）です．詳細は，追って幹事の方から連絡があると思いますので，総会と併せてご予定下さるようお願い申し上げます．

＜昭和４１年卒クラス会＞

原　宣一：

金井　宏：

＜昭和４６年卒クラス会＞

荒川 義博：

＜昭和５１年卒クラス会＞

犬飼 賢一：

＜昭和５６年卒クラス会＞

渡辺 紀徳：

青木 隆平：
Email：

＜昭和６１年卒クラス会＞

長谷川 智彦：

清水 隆三：

＜平成３年卒クラス会＞

田口 秀之：Tel: 0422-40-3481

川勝 康弘：Tel: 042-759-8376

＜平成８年卒クラス会＞

新城 淳史：

岡井 敬一：Tel: 0422-40-3480

姫野 武洋：Tel: 03-5841-6576

＜平成１３卒クラス会＞

堤　誠司：
金崎 弘文：

＜平成１６卒クラス会＞

藤巻 遼平：
牛尾 正人：

ᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕᔕ

＜編集後記＞

大概の用事がメールで済むようになり，あまり電話をかけなくなりました．活字への回帰とでもいうのでしょうか．でも5年に一度くらい，クラス会で旧友の声を聞くのも良いですね．小紫公也（編集担当）